F 9

中学・高校生の食生活と家庭科教育（中2報）

文京学園○吉原ひろ子，滝野川女高 浅賀容子，淑徳学園 石井真理，
大妻中野女高 小瀬川継美，東京農大 加藤みゆき，大妻女大 岡本順子
大森正司

目的 近年、日本人の体位の向上や平均寿命は驚異の伸びを示し、これは食生活に由来するところが大きいものと考えられる。また家庭内暴力、学校内暴力が社会問題化して久しくなるが、近年はその問題も低学令化、狂暴化しているのが現状である。これらが何に起因しているかは大変難しい問題であるが、日本経済の高度成長に伴って核家族化も進行し、結果としてその好ましくない面が強く出たことも一因であると考えられる。これは又、老人問題と表裏一体の問題として起こるものとも考えられる。昨年度はこの様な問題を解決するに当り、家庭科教育の役割は重要である、との判断から家庭科教育を受ける前後の生徒についてアンケート調査をし、主として食生活の面から考察した。今回は更にこの面の実態を明らかにするため、調査実験を行った。

方法 昨年度と同様、都内の私立中・高等学校3校を任意に選定し、入学時の生徒は家庭科教育未経験者、食分野の家庭科を終了した生徒は経験者として、約1000人に対し、アンケート調査を行った。平日のある日の朝食に関して実態調査を行い、集計、解析した。

結果 ①対象者の出生は東京、埼玉、千葉、神奈川が大部分で90%以上を占めていた。②20%弱の生徒が何らかの身体的苦痛の自覚を有しており、テレビを見る時間・好き、嫌いと相関が認められた。食品添加物についての知識と嗜好性についても同様であった。